

平成 30 年度 第 4 回帯広市総合計画策定審議会 議事概要

日 時 : 平成 30 年 8 月 7 日 (火) 18:30~20:30
場 所 : 帯広市役所 10 階第 5A 会議室
出席委員 : 金山会長、有塚委員、河野委員、小山委員、柴田委員、日月委員、
林委員、村田委員、渡辺委員 (以上 9 名)
説明員 : 池原政策推進部長、石井政策推進部企画調整監、西尾企画課長、
(事務局) 中西企画課主査、高橋企画課主査、千葉企画課主査、
廣澤企画課主任、土田企画課主任、西嶋企画課主任補、佐藤企画課主任補、
その他関係部署説明員
傍聴者等 : 報道関係者 1 名
配付資料 : 会議次第、委員名簿、意見集約結果、資料 1~3、
審議会の開催日程について、質問・意見シート

◆会議次第

1. 開会
2. 議事
 - (1) 「産業振興」について
 - 農林業
 - 商工業
 - 観光
 - (2) その他
3. 閉会

◆議事概要

【事務局】 本日は 18 時 30 分時点で、委員 15 名中、8 名の委員が出席し、過半数に達しているため、帯広市総合計画策定審議会条例第 6 条第 2 項の規定により、会議が成立していることを報告する。

ここからの議事進行は金山会長にお願いする。

【会長】 始めに、前回委員の皆様からいただいた意見の集約結果について、事務局より説明をお願いする。

【事務局】 — 資料「前回意見集約結果」及び「前回質問」により説明 —

【会長】 ただ今の説明について、質疑を行う。
意見、質問等あれば、発言いただきたい。

【質疑：特になし】

【会長】 別になければ、次に（１）「産業振興」を議題とする。始めに農林業について事務局から説明願う。

— 資料１により事務局説明 —

【会長】 ただ今の説明について、質疑を行う。意見・質問等あれば、発言いただきたい。

【委員】 農業の「稼ぐ力」を高めていくということを考えた時、例えば、小麦の収量は天候に大きく左右されることから、十勝にあった品種が必要であると考えている。現在、主流となっている品種の「きたほなみ」は、北見の試験場で開発された品種であることから、今後は、気候をはじめとした地域特性を踏まえ、十勝にあった品種の開発を進めてほしい。

また、小麦で稼げない状況が続くのであれば、将来的に作付面積が減っていき、代わりにキャベツやブロッコリーなどの加工野菜が増えていくと考えている。周りにも既に取組を行っている方がおり、カット野菜などの需要もあると思うので、今後は、加工野菜を取扱う事業者を誘致することも考えていく必要がある。

現在、GPSトラクターをはじめ先進技術を活用した農業機械が普及してきており、労働力不足を補っている面もある。しかしながら、そのような農業機械は、総じて高額であることから、国レベルの事柄となるかもしれないが、助成や補助金を含めた支援があれば良いと考えている。

そのほか、労働力不足が深刻さを増す中、今後は、外国人の力も必要になってくると考えることから、農業者には、外国人とコミュニケーションする能力も必要になってくると考えている。

【事務局】 お話のとおり「きたほなみ」は、北見の試験場で育種された品種である。十勝・帯広においても平成27年には、大豊作となったものの、年によっては、なかなか収量が上がらないこともあり、十勝に適した品種を求める声もお聞きしているところであることから、関係機関に対して話をしていきたいと考えている。

十勝においては、農業の後継者は一定程度確保されているが、地域農業の現状としては、収穫期をはじめとした一定の時期に人手が不足している状況であり、本市としても課題として認識をしているところであることから、外国人労働者の活用も含め、いただいたお話については、今後の取組の参考としていきたいと考えている。

【委員】 現在、帯広市で海外に輸出しているものはあるのか。また、今後、輸出を考えているものはあるのか。

【事務局】 現在、地域の農業協同組合から、長いものが海外に輸出されている。

【委員】 それ以外に輸出を増やしていくための支援を検討しているのか。

【事務局】 輸出に関しては、地域の農業協同組合が中心となって取り組んでおり、直接、市が関わっている訳ではないが、例えば、輸出に対応できる工場や選果場の整備などへの補助等を通じて、側面的な支援をしているところ。

【委員】 十勝には牛肉のブランドが乱立していると感じる。販売は個々の会社・団体で行うものであるため、様々なブランドがあることは理解するが、例えば、とち財団で行っているような十勝ブランド認証の仕組みを参考にするなどして、統一の基準を作り、それを満たしているものを十勝ブランドの牛肉として認証していくようなことはできないのか。市で直接関わることは難しいと考えるが、とち財団であれば実施できると考えるが。

【事務局】 十勝和牛については、餌の指定をはじめとした肥育方法について明確な基準がある訳ではない。したがって、牧場によって餌や肥育方法

も異なっており、同一の基準での取扱いが難しい状況となっている。

【委員】 輸出には色々な方法があると思うが、数年前に十勝の農業協同組合が連携して、「十勝ごちそう共和国」というブランド戦略を行ったが、全然活かされていないと考えている。本州でも小豆など一部の農産物では十勝産の認知度は高いものの、その他の農産物の認知度は決して高いと言える状況にはない。このことから、市のみではなく、様々な団体と連携しながら十勝全体として、農産物の付加価値を高めるような取組も必要であると思う。

【会長】 帯広において農業は大変重要な産業であり、今後も基幹産業としての発展を期待していきたいという認識は全ての委員に共通するところであると思う。

【委員】 林業・森林の関係で、帯広に限らず、十勝全体で耕地防風林が減少してきている。防風林は、畑の防風効果のみならず、道路の防風や景観、生態系の保全としての機能など、様々な価値を有しているが、防風林に係る費用を負担し、管理をしているのは所有者である農業者である。

農業者にとっては防風林を植えることで、畑の面積が減ってしまうことから、経営の視点から考えて防風林を減らす選択をすることも止むを得ない面がある。

このままでは防風林の減少に歯止めをかけることはできないと考えることから、観光資源としてなど様々な視点から社会全体として経費を負担するなどの仕組みが必要であると思う。

国では森林環境税の導入が決まり、財源の使い道はある程度市町村に委ねられていると聞いている。この財源を防風林の保護に使用できるかどうかはわからないが、そういったことも含めて、防風林の価値を再認識し、守っていくような取組が必要であると思う。

【事務局】 防風林に関しては、お話のあったとおり、耕地面積を少しでも拡大したいという農業者の考えや近年の農業機械の大型化などに伴い、減少傾向にある。本市としても苗木の補助や周知活動など行っているが、

なかなか植栽数の増加につながっていないのが現状である。

なお、森林環境税の使い道等については、現時点で明確に示されていないことから、財源の活用方法について引き続き情報収集をしていきたいと考えている。

【委員】 農業体験・学習に参加した市民の数が表示されているが、具体的にどのような世代が参加したのか。

【事務局】 帯広市農業技術センターにある展示ほ場において、小学3年生を対象とした農業学習の受入を実施しているほか、帯広の森にあるサラダ館の学童農園で園児や小学生などの受入を行っている。

【委員】 大人向けの体験機会はないのか。

【事務局】 昨年は実施していないが、これまで親子での収穫体験の受入なども行ってきている。

【委員】 農業での労働者確保が大変であるとの話があったが、例えば、こうした農業体験の機会を通じて、農業に興味を持ち、実際の農作業のお手伝いをしたい人と考えられる方が出てくることも考えられる。その意味で非常に良いきっかけになると思う。

【会長】 グローバル化が進む中で、ブランド化も含めて農業の足腰を強くしていかなければならないという認識と、十勝の地域特性に根差した品種改良や十勝での農産物加工の拡大に向けた検討を進めていただきたいという点、外国人労働者も含めた労働力確保の方策、ICTをはじめとした農業の高度化に向けた取組の必要性などについて、ご意見等いただいた。

他になければ、次に、商工業について、事務局から説明願う。

— 資料2により事務局説明 —

【委員】 産学官連携を進めていくためには、コーディネーターの存在が重要

であると考えている。産学官連携が成功している地域には、必ずすばらしいコーディネーターが存在していることから、帯広市において産学間連携や高付加価値化を進めていくためには、コーディネーターの確保や育成が重要であるとする。

【事務局】 本市においては、主にとち財団と帯広畜産大学がコーディネーターとしての役割を担っていただいている。

とち財団には、コーディネートを行うセクションを置いて、人材も配置しており、これまでも文部科学省の事業を活用しながら、産学官連携の取組をおこなってきた。

また、帯広畜産大学の地域連携推進センターにも、コーディネーターが配置されている。

なお、両者の役割としては、とち財団が地域全体のコーディネートを行い、帯広畜産大学の地域連携推進センターは、大学における研究成果を地域に還元させるというものであり、双方が両輪となって地域の企業を巻き込みながら取組を進めてきているところである。

【委員】 商工業については、帯広市でも様々な取組を行っていただいているという印象を持っており、トカチ・イノベーション・プログラムでも著名なゲストを多数招いていただいている。ただし、ゲストに関してはもう少し絞っても良いのではないかと感想を持っている。

コーディネーターについては、他地域から呼んでくる方法もあるが、極力、この地域にいる人材を発掘し、コーディネーターとして育成していければ良いと考えている。

【会長】 商工業の施策について、農業との関わりはどうか。

【委員】 農業分野からいうと、やはり労働力の確保が課題と捉えている。特に畑作に関しては、冬期間に仕事がないので、年間雇用が難しい。経営的には春や秋などスポット的に雇用する形が望ましいが、実態としては、募集してもなかなか人材の確保ができず苦勞している。

【会 長】 今後、ますます人材確保が難しくなっていくことが想定される中で、地域内で労働力を確保していくには、工夫が必要となってくると考える。

【委 員】 帯広市に地域おこし協力隊・地域おこし企業人は何名いるのか。

【事 務 局】 U I J ターンを担当している協力隊員をはじめ、本市に3名の職員がいる。

【委 員】 課題認識の中で若干触れられてもいるが、地域の問題として、倒産件数は減少しているものの、かなり以前から、廃業率が開業率を上回っている状況が続いており、今後、人口が減少していく中で、事業所も減っていくことが想定されることから、既存の中小企業をいかに存続させていくかという視点も重要であると考ええる。

その意味では、事業承継や承継する相手がいない場合はM&A（合併・買収）など様々な方法を検討していく必要がある。

廃業した事業所の中には、後継者を見つけることができず、誰にも相談できないまま事業を廃止してしまうケースもある。

金融機関としても対応を行っているが、全てのケースをケアできている訳ではないことから、そういったケースを少しでも減らしていけるような取組が必要であると考ええる。

【事 務 局】 本市としても事業所の方から話をお聞きしているが、大きくは2つのパターンに分けられると思う。一つは、事業の将来展望が見えず、敢えて継承しないケースで、もう一つは、事業自体は安定しており、継続する意思はあるものの、後継者がいないというケースである。

通常、後者のパターンについては、メインバンクや会計事務所などに相談をしながら、承継先を探すのがこれまで一般的であったが、廃業率が高くなっている状況を踏まえ、いただいた話も参考としながら、取組について検討していきたい。

【会 長】 事業に関する先々の見通しが立てづらい時代であることから、新しい事業展開に関する情報やサポートが求められており、それらをケア

していくことで、事業の安定化が図られ、結果として事業承継にもつながっていくものとする。

【委員】 事業承継について、後継者がいない事業所と事業主になりたいという意欲を持つ若者をマッチングしてはどうか。

【事務局】 他地域で実際にそのような事例があることは承知している。しかしながら、事業承継については、事業所内の人間関係とも深く関わってくることから、難しさを感じている。

【会長】 事業承継のほか、ものづくりをはじめ、この地域で新しい価値を生み出していく体制づくりも重要だと考える。

また、帯広畜産大学で就職の話をする際には、10年後にはなくなっている職業について話題となっている。そうしたことから、今ある事業がそのまま継続するというだけでなく、時代が大きく変化する中で、様々なチャレンジをしていくことと、それらをサポートする体制が必要であるとする。

【委員】 若い世代では、隣同士にいるにも関わらず、スマートフォンを通じて会話するなどコミュニケーションの取り方が変化してきている。

こうした人間同士の接触が少ない、又は他人と接することを負担に感じる世代が将来的に社会の担い手になっていくことも踏まえた上で、様々な取組を想定していかなければならないとする。

【事務局】 技術革新に伴って、将来的には、窓口対応をはじめ、現在、人間が担っている業務をAIに任せることができる可能性がある。そのような時代になると、お話しのとおり、人間と相対する必要性はなくなっていくことになると思うと考えている。

したがって、これからの時代においては、人がやるべきことと、AIをはじめとしたコンピュータがやるべきことを意識しながら、産業振興の取組を考えていく必要がある。

【会長】 他になければ、次に、観光について、事務局から説明願う。

— 資料3により事務局説明 —

【委員】 民泊登録事業者は、帯広市内にどの程度あるのか。

【事務局】 北海道の民泊ポータルサイトによると、住宅宿泊事業（民泊サービス）の届出は、帯広市内に4件、十勝全体で9件となっている。

【委員】 帯広市のDMOにおいて、アウトドアメーカーのブランド力が強力すぎて、地元で頑張っている事業者によるアウトドアの取組が埋もれてしまっているのではないか。

【事務局】 DMOについては、設立して間もないこともあり、具体的な動きを実施できている訳ではないが、昨年度、スノーグランピングを行った際には、十勝管内の様々な観光事業者の協力をいただきながら実施したところである。今後においても、アウトドアメーカーのブランド力を活かしつつも、より多くの事業者の協力をいただきながら地域全体で観光振興を図っていくことが重要であると考えている。

【委員】 グランピングなど高級志向の層をターゲットにした取組のみではなく、地元では、例えば畑ツーリズムなど様々な事業が展開されていることなども踏まえ、多様な観光需要に応じて、それぞれの事業者が活躍できるようにしていくことも重要であると考えている。

【事務局】 本市としても、地域の観光振興を図っていく上では、様々な事業者が活躍できることが必要であると考えている。

まずはグランピングということで、富裕層をターゲットにした取組を行っているが、今後は幅広い層を対象とした観光メニューの提供も検討していきたいと考えている。

【委員】 十勝管内では十勝川温泉旅館協同組合のみが地域DMOとして国に登録されており、帯広のDMOについては、今後、登録申請予定と聞いている。

また、十勝アウトドア観光会議というものを設立されており、今後は、多くの事業者を巻き込みながら観光メニューの開発や提供をされていくと思うが、事業者同士の横の連携を図り、観光メニューを取りまとめるのは非常に難しいと考えている。

なお、着地型観光だけでの自走は難しいと考えており、東京、名古屋、大阪などで観光商品を紹介・販売する送客との連携が必要であると考えている。

そのほか、グランピングだけではロットが小さいので、法人や団体などと連携したビジネスを進めていかないとなかなか自走は難しいと考えている。

【会長】 今後、十勝の観光資源として期待されるコンテンツは何か。

【委員】 今後、期待ができるコンテンツとしては農泊が挙げられると思う。十勝の「スケールが大きい農業」は他にはない観光コンテンツであると考えている。

農業者は生産に専念していただき、その方々の生産の取組をパートナーである観光事業者が、農業観光として提供していく仕組みが広がっていけば、観光客がさらに増加する可能性があると考えている。

訪日インバウンドに関しては、自然増に加え、国も積極的に取組を行っていることから、まだまだ増加していくものと考えている。ただし、帯広市では現状でもホテルの稼働率が高く、宿泊先が不足することが想定されるので、受入体制を検討していく必要がある。

現状、トマムには外国人観光客が多く訪れており、そうした観光客を十勝に呼び込むことができればよいと考えている。

【会長】 農業を観光資源としてどのように活かしていくかということが、地域の観光振興を図っていく上でのポイントになると考える。

【委員】 無人トラクターへの乗車体験だけでも魅力ある観光コンテンツとなり得る。

【会 長】 ターゲットの明確化を図ることに加え、多様な地域資源を活用し、様々な方に向けた観光メニューの提供を行っていくことの必要性などが意見として出されたが、他に何か意見等はあるか。

【委 員】 個人的には帯広の観光地といわれてもすぐには思い浮かばないが、自動車で移動される方が多いと考えるので、観光スポットは自動車で行きやすいようにしていくべきであると思う。

また、農業を観光資源として、より活かすために農業のテーマパークのような場所があると面白いのではないか。

そのほか、観光客のみならず地元の方も楽しめる観光地があれば良いと考える。農業者の畑では体験の受入が難しいと考えるので、夢のような話にはなるが、観光スポットとして遊ぶ目的の畑があっても良いと考える。

【委 員】 先日、認知症になっても住みやすいまちにしようという趣旨のイベントがあり、その際に、緑ヶ丘公園において、ドローンで写真を撮影していただいたが、参加者は皆大変喜んでいました。

十勝・帯広は、ドローンの運転・撮影に最適な場所がたくさんあると思うので、ドローンを活用した遊びができる場所などがあると良いと考えている。

【会 長】 市民が遊びの達人になれば、面白い発想が生まれてくるかも知れない。

【委 員】 サイクルツーリズムについて、北海道でも推進をしており、十勝でもサイクルマップの作成も含めて様々な取組を行われていると思うが、サイクルツーリズムにおける目標・K P Iはあるのか。

【事 務 局】 サイクルツーリズムに関してのK P Iは設定していない。

これまで、サイクルツーリズムに係る環境整備等を実施してきたところであり、今後は、プロモーションも含めた周知を図っていきたいと考えている。

【会 長】 サイクルツーリズムに関しては取組がはじまったばかりだということだと思うが、目標・K P Iをもって進めることも重要であると考え
る。

【委 員】 帯広の森のはぐく一むにおいて、冬期間にクロスカントリースキー
の無料レンタルをしているが、昨年、交通の便が悪い所であるにも関
わらず、外国人がJ Rやバスを乗り継いで来所されたことがあった。

帯広にはJ I C Aの施設や帯広畜産大学などがあり、外国人研修生
や留学生も含めた外国人が多数いらっしゃるが、交通のルールがわか
りづらかったり、交通の便が良くない部分もあることから、外国人が
住んでいく上で、生活がしやすいという視点から改善することも、結
果として観光の振興につながっていくと思う。

【会 長】 今後、海外からの観光客が増加していくことが想定される中で、観
光客を受け入れるための、交通体系・交通環境の整備はますます重要
になってくると考える。

他になければ、最後に、(2)「その他」を議題とする。事務局か
ら説明願う。

【事 務 局】 審議会の中でお話できなかった質問や疑問があれば、本日配付した
「質問意見シート」に記入の上、事務局まで提出いただきたい。

【会 長】 以上をもって、本日の会議を終了する。

以上